

海の生き物から学ぶもの

京急油壺マリンパーク

樺澤 洋

水族館は海に住む生き物の「生きざま」を来館者（ヒト）に供覧する施設であり、私はその仲介役を業として今日に至っております。このような立場にありますと、海の生き物、とりわけ同じ脊椎動物の仲間である魚の視点でヒトを眺めてみようという、素朴な想いに駆られることがあります。

水中と陸上という生活圏の相違を考えても両者に大きな隔たりを覚えますが、その一生にも大きな相違があります。一部の例外を除き、ほとんどの魚は卵を産みっ放しであり、親の養育という過程はありません。孵化した仔稚魚は視聴嗅味触の五感を総動員して外敵から身を護りつつ、餌(生物)を探して成長への道をたどりますが、その多くもまた他動物の餌に轉身し、わずかの生き残り集団が成熟して生命の灯を次代に伝えます。

ヒトは言語で意思を伝え、直立歩行機能を獲得すると、自由になった前肢(手)で道具や火を使い、大脳による記憶や知恵の発達に食糧の計画的生産とその保存法を開発して飢えをしのぎ、衣服をまとって暑さ寒さを回避する術を身につけました。加えて、前世紀後半から急速に台頭した科学技術の進展は心地よい生き方と利便性を提供しています。このような高次機能を有する動物は他に見当たりません。

魚とヒトは大きな乖離を示す一方で、系統進化が教える動物の分類法によれば、30 数億年といわれる生命史の中で、両者は生命体としての属性の多くを共有する近縁の存在でもあります。生命は海に誕生し、さまざまな変遷を経て、今からおおよそ 5 億年前にさしかかると魚らしい動物が現れました。やがてその一部が上陸を敢行して、両生、爬虫、鳥、そしてヒトを含む哺乳類へと進みました。

ヒトは万物の霊長であり、進化の頂点に立つといわれますが、魚がヒトを理想像としてヒトに近づこうとしているわけではありません。生命という存在は、それぞれの種に付与された内外の生存環境と共軛する自己創発的なシステムであり、生命現象に目指す目的はないように映ります。

科学技術の発達は実用化と洗練を繰り返しながらヒト固有の利便性を追求してきましたが、その速度は生命進化のそれをはるかに超えています。今日では、その反省ともいえるべき「自然保護」、「環境教育」、「生物の多様性」、「種の保存」などの用語が登場するようになり、地球を 1 個の生命体とする考えもあります。

ヒトは心身の発達過程、特に幼児期に海や山で生き物を含む自然を存分に体感して、ヒトはやはり動物の一員であることを改めて自覚する必要があるようです。動物園や水族館の“生きた教材”にもそのヒントがあります。このような自覚と英知が、将来に向かう科学技術の処方箋に明るい示唆を与えるものと考えます。

魚って何だろう

食べておいしいもの、釣って楽しいもの　――　これが魚です。
タイ、ヒラメ、ウナギ、キンギョ　――　だれでも知っている魚です。

ところが、「魚とは・・・」という魚の定義になると、これがなかなか難しいものです。どの参考書を見ても、多くの魚は一生のほとんどを水で暮らし、卵を産み、エラで呼吸し、ウロコがあり、ヒレを使って泳ぐ・・・、などと書いてあります。多くの魚は確かにその通りですが、水がなくても空気を呼吸するもの、子供を産むもの、ウロコのないものなど、例外組もいます。多くの・・・が示すように、動物の仲間分けは曖昧で確率的です。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫・・・これは七色の虹を示していますが、それぞれの色の境界がやはり曖昧です。虹の総体を眺めれば、「連続した色の流れ」と映ります。今流に言えば、「七色」はデジタルで、「色の流れ」はアナログということになります。

連続的に変容するものを理解するには、デジタルとアナログという2つの手法が必要です。人間は膨大な情報を脳に送り、記憶します。したがって魚類という一群を動物群のひとつの象徴的な「虹の色」として整理し、デジタル化して脳にインプットする方が賢明です。

30数億年という生命史の流れを覗けば、動物も変容の道をたどりました。その意味で、魚類もひとつの「虹の色」を示すにすぎません。分類上、魚類の前後には円口類（ヤツメウナギなど）と両生類（カエル等）がそれぞれの「虹の色」を構成していますが、水で暮らし、卵を産み、エラで呼吸し、ヒレを使って泳ぐ（カエルではオタマジャクシ）ことは円口類、魚類、両生類の三者は共通していますから、その境界はやはり曖昧でアナログ的です。

このように、魚類という一群を「流れの中のひとつの淀み」と考えれば、その本質を定義すること自体、あまり意味がないように思えます。

そして、その淀みを少し下ると、ほどなく人類が見えてきます。